
ポケモンテロリスト

片翼のたしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンテロリスト

【Nコード】

N3358Y

【作者名】

片翼のたしろ

【あらすじ】

ポケモンが主人公の冒険ものはいくつかありますが主人公のポケモンが悪役の物語を書いてみました

第1話 暗躍

ここは様々なポケモン達が暮らす大都市

この世界のポケモン達は高度な文明を築き上げ、巨大建造物を作り人間のものとほとんど変わらない企業を作り上げ、人間と同じような社会を形成していた

しかし、高度に進化した社会に住んでいるのは正しい価値観をもつポケモンだけではなかった…

「———今回の新商品により我が社の今月の売り上げは前年比12%増になっています、今年のボーナスは期待できそうですね」

「またカジノにでも行くかぁ」

巨大なビルの中のある会社のオフィス、どう見ても似合わない分厚いメガネをかけたニドキングが上司のカビゴンに書類を提出していた

「勘弁して下さいよー、この間とんでもない金額使ったばっかじゃ

ないですかー」

「何言ってる、金は使うためにあるんだろー」

2人はこの都市の数ある巨大企業の中でもトップに立っている企業に勤めている

今日は残業帰りのようだ

「新人の自分にはきつすぎますよー（汗）」

ニドキングは先月中途採用で入社したばかり、しかも上司の接待で給料の大半を持っていかれているので大企業勤めだが苦しい生活をしている

特に上司カビゴンはかなりの豪遊でニドキングはほとんど迷惑していた

「残業付き合ってやってるんだから、強制だぞー」

「……………」

今月も地獄のような生活が始まるのかと思い、がっくりと肩を下ろ

すニドキングであった

一方その頃、別のビルでは

「…全階層、セキュリティ侵入…端末にウイルス送信、パスワード入力、制御システムコントロール完了…こっちはOKだ、いつでもいける」

（了解、こちらも準備OK）

暗い部屋でヘッドホンをつけた水色の身体に無数の触手をもつポケモン、ドククラゲが無数のモニターを見ながら触手をフルに使って休むことなくキーボードを叩いていた

ドククラゲの背後の暗闇からもう一匹が話しかけた

「あとどの位で終わる?？」

「あと10秒くらいだ」

ドククラゲはモニターから目を離さずに答える

「このビル街のコンピューターを全て掌握するなんて、現実離れした事が本当にできるなんてね…」

「当然だ、オレはハッキングのプロだからな…あいつ以外の奴らはまだ動かないのか?？」

「ええ、まずはあなたが下準備を終わらせてからになるわね…」

「そうか……………よし…今ちょうど終わったぞ」

それを聞いたもう一匹のポケモンが無線機を取りスイッチを入れた
「こちらオペレーター、ビル街のコンピューターは全て掌握、あなた達も準備に取りかかって頂戴、リーダーは今すぐ持ち場へ移動して、夜明けまでに終わらせるわよ」

(…了解)

(…りょーかい)

(…了解、もう終わってるけどね)

無線機から他の仲間の応答が聞こえた

「：リーダーの応答が無いな」

「いいのいいの、どうせ返事するのを面倒くさがってるだけよ、それより少し休めば??」

あとは監視カメラで見張ってるだけでしょう???
それなら私だってできるわ」

「いいのか??」

「構わないよ、明日働いてもらうからね」

暗い場所に立っていたポケモンがドククラゲに代わりモニターの前に座る

青いがっちりした身体を持つニドクインと呼ばれるポケモンだ

彼女はモニターを見ると、再び無線機を手に取り仲間の1人に通信した

これまた違うビルの中

証明が落ち、真っ暗な通路の中で大きなコブラに似たポケモンが居眠りをしていた

(ヘッジ、サボってんじゃないわよ)

ヘッジと呼ばれたアーボックは寝ぼけながらもニドクインからの無

線に応答する

「へい、こちらヘッジ…サボってなんかいませーん」

彼等とはあるテロリスト集団の幹部、夜明けより実行する作戦の下準備をしていた

このヘッジは夜中のビルに潜入しある作業をしていたのだがヘッジは眠気に耐えきれず居眠りしていたのだ

（ウソについても無駄よ、監視カメラで、あんたがビルホテルの三階の通路で居眠りしてるのはわかってんのよ）

「チッ…わかりましたあー」

ヘッジは投げやりに返事をするとう無線を切って起き上がった

「徹夜なんだからちよつとぐらいいいじゃねえかよー」

（お前はもう少し真面目にやれ…オレはお前より先に終わりそうだぞ）

（ボクなんかとっくに終わってるから、さっさとすませちゃいなよヘッジ）

「チッ…どいつもこいつも張り切っちゃって…」

悪態をつきながらもヘッジは暗闇の通路へ消えていった

そして、午前6時

朝日が銀色のビルを明るく照らし始めた頃それは始まった

大小様々なビルの屋上から地上へ約1m位の大きさのビンが次々に落とされ、パリンという音を立てて割れていった

それを合図にしたかのように少し離れた場所にあるビルが爆発し粉々になった

それも1つだけではなく轟音をたていくつも崩れ去った

この事態に都市に住むポケモン達が気づかないはずもなくすぐに都市はパニック事態になるかと思われたが市街地には人影1つなかった

実はさっきばらまかれた瓶には強力な睡眠作用があるガスが入っており都市の住民達は換気扇やエアコン、窓から自宅に侵入したガスを吸って目覚めずに昏倒してしまっていたのだ

それをビルの上空で見っていた一匹のモルフォンがいた

「ふふ、このガスはとても小さな微粒子で形成されてるからどんな隙間から入り込めるし、フィルターなんてモノも無駄：予想以上の威力だよ」

彼もヘッジ達の仲間の1人、薬物や毒物の扱いに長けているこの睡眠ガスも彼が作り出したものだ

ご満悦のモルフォンは仲間の待つビルへと向かった

その様子をモニターで見ていた

ニドクインの隣には紫色の怪獣のようなポケモンが立っていた

「ここまでは予定通りか、さすがおれの見込んだ奴らだぜ」

「そろそろあんたの出番ね、リーダーさん」

「わかってるさジーナ、行ってくるぜ」

リーダーと呼ばれたポケモン、ニドキングは似合わない分厚いメガネをゴミ箱へ投げ捨て、部屋を後にした

第2話 開幕

午前6時30分

ポケニア国の全土に報道された臨時ニュースに全国のポケモン達は衝撃を受けた

ポケニア国第二の大都市、フルームシティが何者かの襲撃により全企業、全機能の停止、及び瓦礫による交通不可状態

詳細は不明なものの都市全域に毒ガスの充満、市民の安否は不明

このニュースにより国家全体がパニック状態に陥った

勿論国家の中枢も例外ではなく、国のトップを収集し緊急会議が行われた

「今すぐ軍隊を派遣すべきだ！」

「市民の非難も安否確認すらもままなら無い状態でそんなことが出来るか！」

「じゃあ何か方法があるのか!？」

ピリピリした状態の会議で議長であり国家元首でもある炎を操る伝説ポケモンのエンテイは対策を決めかねていた

その時…

会議室のドアが勢いよく開かれ血相を変えたヘルガーが受話器を持って入ってきた

「エンテイさん! しゅ、襲撃事件の首謀者と思われる者からお電話です!！」

「……………!」

静まり返った会議室

静かにエンテイは受話器を取った

「……もしもし……？」

『ごきげんよう、あなたがポケニアの国家元首、エンテイですね？』

相手は変成器で声を変えて話していた

「…そちらの目的は何なんだ!？」

『ふふふ、まあそう邪険になさらずに…安心して下さい市民にはかすり傷1つつけていませんよ…ですが』

「何だ!？」

バキバキ…

——ズドオオオオオオン!!

エンティの目の前の窓に映っていた時計塔が爆破され物凄い轟音を立てながら真っ二つに折れた

同時に会議室はパニック状態と化していた

『身の代金として200億ゼニー用意して頂きたい、フルームシテイ全域に爆弾を仕掛けてあります、あなたの愛する市民を目の前の時計塔のようにされたくなければ

今から36時間後の明日の18時30分までに200億、用意してもらいますようか?? 場所は後ほどこちらで指示します

では、いい答えを期待してますよ、はっはっはっはっはっは!』

声の主はこの事態を楽しんでいるようだった

怒鳴り声や悲鳴が鳴り止まない会議室でエンティは1人怒りに打ち震えていた

「皆、揃ったな」

場所は移りニドキング達のアジトでは仲間達が集まりミーティングを行っていた

「今後のことだが、エンテイには身の代金の金額と期限を伝えたそして、オレ達は外で指示を受け動くか待機してここを中心に動く2つのグループに分かれよう」

「まず、外で指示を受けるのはヘッジとファングだ。お前らにはうつてつけの仕事だしな」

ファングと呼ばれたのは紫色のサソリのような体型をした鋭い爪を持つポケモン、ドラピオンだ

ドラピオンのファングの得意とするのは白兵戦や奇襲、暗殺

主に要所の制圧を行うことが多いが、今回はテレビ、ラジオ局の通信機器の破壊を行った

対するヘッジの得意とするのは潜入

今回ビルや時計塔に爆弾を設置したのもヘッジである

2人の得意分野を考えると最適と言える

「ここに残るのはオレとジーナ、あとスィンクとカイルだ」

ジーナはニドクイン、スィンクはモルフォン、カイルはドククラゲの名前だ

「カイルは監視カメラやコンピューターで市街地やアジト内の偵察を行ってくれ、ジーナはオレが不在の時の指揮とカイルのサポート、

スィンクは麻痺毒ガスと強力な酸液を早い内に準備しといってくれ」

指示を聞いたニドクインのジーナは不機嫌そうな顔をしていた

「……………不在って、あんたリーダーでしょ!？」

「おれはこの防衛をする、この4人じゃ一番強いのはオレだし…
まあ、万が一の時に備えてお前らも一応戦闘の準備はしておけよ」

「あんたが一番ヒマな仕事じゃない…」

「…ち、違うし! (汗)」

ともかく、ここがやられちゃお終いだから責任重大だぜ」

ちなみに、この2人の関係は恋愛関係等ではなく双子の兄妹である

「そう言えば、スィンクがばらまいた睡眠ガスだけどここは大丈夫
なのか?？」

ヘッジが思い出したように口を開く

それに答えたのはカイルだった

「問題無い、1階からこの部屋に繋がっている部分まで全てシャツ
ターで閉鎖してある」

「それに、このガスは空気に触れてしばらくすると滞留してあまり
舞い上がったりはしないようにしてあるから大丈夫だよ」

モルフォンのスイंकが付け足しをする

「そうか、ならいいけどよ」

ヘッジはまだ少し不安なようだ

「早速ファングとヘッジは動いてくれ、ファングは部下達と軍隊に潜り込んで奇襲の準備、ヘッジは国のトップの奴らの動きを監視してもらう、現地までは屋上のヘリで向かってくれ」

「分かった」

「監視かぁ、何日徹夜になるだろうか：（汗）」

「ふふ、心配ない、オレの読み通りならすぐに動きがあるはずだ、動きがあり次第こちに報告して戻って来てくれ」

「あいよ、んじゃ行ってくるぜ」

ヘッジとファングは屋上へと向かった

「すぐに動きがあるってのはどういう事なんだい??」

「通信であれだけの挑発をしたんだ、すぐに何らかの特殊部隊か軍隊：もしくは両方を動かす筈だ、軍隊ならファングに奇襲させる、特殊部隊の方は後のお楽しみだ、とにかく詳しい内容はヘッジからの報告を待とう」

ニドキング達と国家の闘いが今、幕を開けた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3358y/>

ポケモンテロリスト

2011年11月8日12時09分発行